

マレー・シンガポール作戦 山下奉文を中心に

立川京一

はじめに

太平洋戦争当時もそして今日に至るも、山下奉文は緒戦における戦勝将軍として、海軍の山本五十六と並んで高い評価を受けている。その名声は日本のみならず、海外にも聞こえ、「日本で出た最高の将軍」というような紹介のされ方をしている¹。シンガポールのフォード工場跡におけるイギリス軍との停戦交渉で敵将パーシバルに「イエスカ、ノーか」の回答を迫ったという逸話、写真や映像で見る巨大な体躯、大きな目といった風貌、「マレーの虎」という異名などによって、英雄的なイメージはいっそう増幅されているようである。

ところが側近の見る山下は、こうした評判とはやや異なっている。例えば、日本陸軍第25軍の作戦主任参謀として山下軍司令官のもとでマレー・シンガポール作戦を遂行した辻政信は、

堂々たる体躯と魁偉な容貌とに輝かしい過去の経歴を背景として、内外に貫禄を認められた器であり、永年、軍政の中枢に活躍されたためか、細かい点までよく気がつき、豪傑風の外貌に似もやらぬ頭脳明晰な、政治家型のところも多分にあった²

と著書の中で述べている。また、同じく第25軍の作戦参謀であった国武輝人は、

あの偉大な体躯から一般に言われているように腹の太い、豪放磊落な将軍だと思っていた。しかし、同時に繊細、鋭敏な神経の持ち主でもあるとは知らなかった³

と述べている。後日、山下自身が述べていることであるが、パーシバルとの停戦交渉における「イエスカ、ノーか」という発言は、通訳官がもたもたしているのに、イライラして、彼に向かって「イエスカ、ノーか、訊け」と言うつもりで怒鳴ってしまったのが、あのように報道されたのであるらしい⁴。また、写真などで見られるように、山下が胸を

¹ Arthur Swinson, *Four Samurai: A Quartet of Japanese Army Commanders in the Second World War* (London: Hutchinson, 1968), pp. 90-91.

² 辻政信『シンガポール 運命の転機』（東西南北社）1952年、37頁。

³ 国武輝人「マレー軍司令部 第二十五軍かく戦えり」（『丸』別冊第8号「戦勝の日々」1988年3月）469-470頁。

⁴ 安岡正隆『人間将軍 山下奉文 「マレーの虎」と畏怖された男の愛と孤独』（光人社、2000

大きく張っている姿も、弱さを見せまいとして意識的にとっていたポーズであった⁵。さらに、「マレーの虎」という異名も、酒に酔って虎になることを最も嫌っていた山下にとっては、迷惑以外の何ものでもなかった⁶。どうも、我々が抱いている山下のイメージは一面的で、当時のマスコミ報道などによって創られた像に影響されている部分が大いなのではなからうか。もちろん、現実とイメージとの間にギャップがあるからといって、マレー・シンガポール作戦を成功に導いた軍司令官という栄誉が損なわれることはないであろう。その評価は同作戦における山下の指揮官としての指導振りを見ることによって下されなければならないからである。

しかしながら、実際のところ、開戦からシンガポール陥落に至る過程での山下の指導振りに関しては、具体的にはあまりよく分析されていないのである。作戦中、山下はいかなる認識や事情を背景に、どのような判断を下したのであるか。山下の決定は戦局を左右したのであるか。その指導に何らかの特徴を見出すことができるであろうか。また、そこには山下の人柄や性格が反映しているであろうか。

作戦計画の立案と山下奉文

作戦中の指導の問題に入る前に、作戦計画の立案過程における山下の役割について見ておきたい。マレー・シンガポール作戦は厳密にはマレー攻略作戦とシンガポール攻略作戦の2つの作戦から成り立っており、それぞれの作戦計画は異なる時期に立案されている。

マレー攻略作戦の研究は、立案を担当した国武輝人によれば、参謀本部作戦課において開戦の1年以上前、1940年8月に着手され、翌1941年10月末に作戦計画が決定している⁷。この間、山下は陸軍航空総監兼陸軍航空本部長、次いで関東防衛軍司令官の職にあってマレー作戦の立案と無関係であった。また、開戦前の半年は、満州赴任の直前までドイツとイタリアを訪問するなど、ほとんど日本を不在にしていた。マレー攻略作戦計画は1941年11月に山下が第25軍司令官に就任するのを待って確定するわけであるが、実際、マレー攻略作戦計画の立案過程において、山下は「ひと言も言葉をさしはさめなかった」⁸のである。したがって、マレー攻略作戦における山下の指導については、

年)354-355頁。映像で見る山下とパーシバルの会談のシーンは、フィルムのリターンを落として撮影し、映す際には普通の速度で映しているの、動作が速くなって余計に迫力が出ているのである(『日本ニュース』報道班員座談会「太平洋戦争の決定的瞬間」〔『歴史と人物』1986年12月〕284頁)。

⁵ 沖修二『山下奉文』(私家版1958年)185-186頁。

⁶ 同上、159-160頁。

⁷ 国武「マレー軍司令部」463頁及び陸戦史研究普及会編『マレー作戦(第二次世界大戦史)』(陸戦史集(原書房、1966年)8、23頁)。

⁸ A・J・パーカー『「マレーの虎」山下奉文 栄光のシンガポール攻略戦』鳥山浩訳、第二次世界大戦ブックス65(サンケイ新聞社出版局、1976年)52頁。そこには「自分が譲歩しても大勢に

作戦遂行中に状況に応じて当初の作戦計画を修正したいいくつかのケースを取り上げて検討するほかない。

一方、シンガポール攻略作戦に関しては、クアラルンプールを占領したことによってマレー攻略作戦に目処が立った1942年1月13日、山下が作戦主任参謀の辻政信に「シンガポール攻略の構想を与へ、十分に練ら」せているので、作戦の基本線は山下が引いたと考えてよいであろう。この時に山下が辻に与えた構想とは、「正々と海峡を渡り、水源地辺の高地にて一応注意を喚起して投降せんことを勧告す。応ぜざれば、爾後は全兵力を挙げて堂々と殲滅戦に移行す」というものであった⁹。シンガポール攻略作戦計画はこの山下構想をもとに、マレー攻略作戦同様、国武輝人が遂行中のマレー攻略作戦に関する参謀業務の合間を見つけて立案し、辻と作戦課長の池谷半二郎が意見を出しつつまとめた。それに山下が承認を与えたのが、ちょうど第25軍の第一線部隊がジョホールバルに前進した1月30日であった。翌31日、山下は第25軍隷下の近衛師団、第5師団、第18師団に同作戦計画に基づく攻撃準備に関する軍命令を、2月6日には攻撃命令を下達する。ところが、その直後、山下はこの作戦計画に重要な修正を施すのであるが、そのことについては後で言及する。

マレー・シンガポール作戦はほぼ作戦計画通りに進捗した。もっとも、作戦に要した期間は、当初、予想した100日¹⁰よりも丸1か月短い70日で終了した。「作戦速度が非常に速く、部隊の到着は逐次で、長期にわたった」ため、「作戦進展のあいだにこの逐次到着する部隊に任務を与え、部署につかせるための軍命令は、百数十におよんだ」ものの、「軍の基本的な方針や師団の任務、目標を示すような大きな軍命令は、全作戦間四、五回にすぎなかった。」¹¹したがって、山下が状況に応じて判断を下す必要があった重要な局面は極めて限られていたわけである。とくに、マレー攻略作戦に関してそう言える。そこで、まず、マレー攻略作戦中に山下が判断を下す必要があった数少ないケースのいくつかを取り上げて検討する。

マレー攻略作戦

山下が判断を下さなければならなかった最初の場面はシンゴラに上陸した直後に訪れた。第25軍の作戦計画は方針として、上陸後、「英国軍を撃破しつつ『ペラク』河の線

影響がないときは、ほとんど我を通すことはなかった」(沖『山下奉文』284頁)という山下の性格が反映したのかもしれない。

⁹ 沖『山下奉文』360頁。

¹⁰ 1941年11月5日の御前会議における原嘉道枢密院議長の質問に対する杉山元参謀総長の説明(防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 マレー進攻作戦』(朝雲新聞社、1966年)113頁)。山下自身は作戦開始から50日でジョホールバルに達し、2月11日の紀元節に合わせて、シンガポールを陥落させたいと考えていた(安岡『人間将軍』284頁)。

¹¹ 国武「マレー軍司令部」476頁。

に向かい突進す」¹²（甲案）としている一方、「不幸にして、英軍が先に上陸点に進出した場合の乙案」¹³、すなわち「状況に依り、軍主力を以てする第一次上陸困難なるを予察せらるる場合に於ては、一部を南部泰に進駐せしめ、同地付近に航空基地の進出を待って軍主力の上陸を実施することにあり」¹⁴としていた。後者の乙案により橋頭堡を確保する考えは大本営が主張していたようであるが、第 25 軍は前者の甲案に沿って作戦計画を策定していた。そして、最終的にシンゴラ上陸後、山下は当初の軍の方針通り、甲案、すなわちペラク河の線、ひいてはシンガポールへの一挙突進を決断する¹⁵。イギリス軍が上陸点に進出していなかったことがこうした判断の大前提であったが、山下自身はほかにもその理由として、シンゴラ付近に良質の飛行場がなく、整備には時間がかかること、ペラク河の橋梁をイギリス軍に破壊されないうちに確保したいこと、そして、イギリス軍に増援部隊が来着すれば日本側に不利となることを挙げている¹⁶。また、山下は第 25 軍司令官に着任した直後、サイゴン近郊でジャングルやゴム林をはじめ見た際に、「連絡だけを注意すれば」「突進に便」¹⁷と感じていたことも、こうした判断を助長したと思われる。山下は沈思黙考型に見られるが、多分に直感的なところがあった¹⁸。

結果から見れば、この判断は適切であった。イギリス軍は守備態勢を十分に整えられないうちに日本軍部隊と交戦しなければならなかったのである。日本軍の一挙突進によって、万全な反撃態勢をとる時間的余裕を持てなかったイギリス軍は陣地を次々と突破されたことによって急速に戦意を失い、それが日本軍の作戦成功につながったと考えてよいであろう¹⁹。

また、人種主義的と批判されてもやむを得ないであろうが、山下はイギリス軍が「インド人を混ざる軍隊ならば仕末し易し」²⁰と考えていた。つまり、山下は戦前からイギリス軍は士気も実力も低いと見ていたのである。

『統帥綱領』には、

内線作戦もまた、情況によりしばしば偉功を奏するものとする。殊に兵力優勢なるも

¹² 『戦史叢書 マレー進攻作戦』167 頁。

¹³ 国武「マレー軍司令部」466 頁。

¹⁴ 『戦史叢書 マレー進攻作戦』167 頁。

¹⁵ 陸戦史研究普及会編『マレー作戦』32-34 頁。

¹⁶ 「山下奉文大将御進講草案」(防衛研究所図書館所蔵)。

¹⁷ 沖『山下奉文』339 頁。

¹⁸ 同上、180 頁。

¹⁹ この点に関して、パーカーは山下が「イギリス軍の士気を打ちくだかなかつたら、イギリス陸上部隊の人的な優勢が実際に発揮されていただろう。そうなれば、日本軍の作戦は困難をきわめ、膠着状態も長びいたに違いない」と述べている(パーカー『“マレーの虎”』84 頁)。

²⁰ 同上、329 頁。1941 年 11 月 20 日、山下は第 25 軍将兵に対する訓示の中で、「敵は英人なり、敵軍の最大弱点は人種混交し、其精神的団結極めて脆弱なるにあり。敵軍抵抗の中枢たる英人幹部及英人基幹部隊に一撃を与ふれば、他は自ら土崩瓦解す……」と述べている(「歩兵第十一聯隊第三中隊陣中日誌」第 3 冊〔防衛研究所図書館所蔵〕)。

攻撃精神旺盛ならざるが如き敵軍に対して然りとす。而して、この作戦は往々受動の弊に陥り易く、各個撃破の成果^{まった}からざれば後害残すをもって、これが指導にあたりては巧みに戦機を看破し、特に勇猛大胆なる決心と機動とを必要とす²¹

とある。マレー作戦が内線作戦であったかどうかという議論は別にして、山下がマレー攻略作戦で、「兵力優勢なるも攻撃精神旺盛ならざるが如き敵軍に対して」機動力を生かし、一挙突進したことは理に適っていたと言えよう²²。ただし、山下が一挙突進を決心した裏には、イギリス軍の兵力を誤認していたという事実がある。それは次の問題と大いに関連する。

山下が二番目に下した重要な判断は、増援部隊として予定されていた第56師団の返上である。当初の第25軍作戦計画では、マレー・シンガポール作戦には近衛師団、第5師団、第18師団に加え、第56師団²³を最後尾に投入することになっていた。しかし、12月24日、南方軍の青木重誠参謀副長と荒尾興功参謀がタイピンに進出した第25軍司令部を訪れ、隷下の一部部隊の他方面（具体的にはフィリピン方面）への転用を要求した。第25軍は南方軍の窮状を察し、まだ内地において集結中であつた第56師団、「シンガポール攻撃の切り札と考えていた」²⁴砲兵部隊²⁵を譲ることに同意した。「進捗状況より推して当初の作戦計画に應ずる部隊は必ずしも之を要せざるべく又輸送可能期日と作戦進捗予想よりして作戦に間に合わざるべきを判断」²⁶したとはいうものの、さらには先頭部隊が第一目標としていたペラク河の線に到達し、渡河命令も発していたとはいえ、「まだ作戦がはじまってわずか半月、今後の見通しもつかぬ時期」²⁷であつただけに、難しい判断であつたろうことは想像に容易い。作戦参謀の国武も戦後の回想記の中で「清水の舞台から飛び下りるような気持で同意した」²⁸と述べている。いずれにしても、作戦中の部隊がこのように兵力を返上することは極めて異例である。

ただし、この判断の根底には、先に述べたように、イギリス軍の兵力に関する認識に誤りがあつたことは指摘しておかなければならない。山下をはじめ第25軍司令部では、

²¹ 防衛教育研究会編『統帥綱領・統帥参考』（田中書店、1983年）8-9頁。

²² 皮肉な見方ではあるが、イギリス軍はたとえ時間をかけたとしても、日本陸軍の最強部隊である第5師団と第18師団に抗するにはとりわけ質の面で劣位にあり、増援の見込みも薄く、どのみち十分な守備態勢を整えることができなかつたと考えるならば、なおさら日本軍が上陸点に橋頭堡を確保して全軍の終結を待つ必要はなかつたと言えなくはない。

²³ 第56師団は他の師団に少し遅れて、1941年11月27日に第25軍戦闘序列に追加されている（『戦史叢書 マレー進攻作戦』119-120頁）。

²⁴ 国武「マレー軍司令部」484頁。シンガポール攻撃では、砲兵の射撃効果が大いに期待されていたのである。

²⁵ 二十四榴弾砲兵1個連隊、山砲兵1個連隊、迫撃砲兵2個大隊をフィリピン攻略作戦遂行中の第14軍に譲渡した（陸戦史研究普及会編『マレー作戦』193頁）。

²⁶ 国武輝人「馬來戦記」（防衛研究所図書館所蔵）。

²⁷ 国武「マレー軍司令部」484頁。

²⁸ 同上。

イギリス軍の兵力を「多くてもせいぜい5万くらい、下手すれば3万くらい」²⁹と考えていたのである。しかし、実際の兵力はその倍であった³⁰。こうしたイギリス軍の兵力に対する過小評価はシンガポールを攻略し終えるまで修正されることはなかった。辻政信が回顧しているように、まさに「知らぬが仏³¹」であった。山下自身ものちにこう語ったという。「マレーのたたかいは敵をかるく見ていたことが図に当たった。」³²

仮に第56師団が山下の隷下に残っていた場合を考えてみよう。第56師団が集結を終え、軍主力を追及してくれば、当然、軍の戦力は増すことになるが、狭隘なマレー半島先端に総勢約5万人の戦闘部隊がひしめき合う状態になったであろう。そうなると、ただでさえ不十分であった補給が一段と不足することになったであろう。おそらく、弾薬は十分にいきわたらず、糧秣の不足にも拍車がかかったであろう³³。そうなれば各部隊がその能力を遺憾なく発揮することは難しくなった可能性が高い。あるいは、シンガポール陥落までに第56師団の到着が間に合わないという事態も当然あり得た。こうしてみると、たとえ先行き不透明な状況であったとしても、日本軍の戦闘全体を考えてみた場合、第56師団を他方面³⁴に投入して有効活用できるのであれば、その方が望ましく、そういった意味では、山下の判断は合理的であったと言えよう。

隷下の諸師団の運用に関しても、山下の指導が影響したことは間違いない。とりわけ、第18師団と近衛師団の扱いには山下の意志が反映された形跡が認められる。

第18師団長は山下が信頼を寄せている牟田口廉也であった。しかし、同師団は一部（佯美支隊）が開戦当日にコタバルに上陸し、その後、南下を続けていたが、師団長の牟田口を含め、師団の主力は仏領インドシナのカムラン湾に集結して、出撃命令を今や遅しと待っていた。南方軍はこの第18師団主力をマレー半島東岸のイギリス軍陣地付近に敵前上陸させる計画を2度、構想した（Q作戦、S作戦）³⁵。また、第25軍も一旦はこの南方軍の構想に合わせて作戦計画を修正した（12月17日）³⁶。しかし、その後、マレー攻略作戦が順調に進捗したこともあり、山下は第18師団主力を敵前上陸させる

²⁹ 朝枝繁春「英国史上最大の降伏 作戦参謀のマレー戦記」(『歴史と人物 増刊 太平洋戦争 開戦秘話』1983年1月)125頁。

³⁰ 実際のイギリス軍の兵力は8万8600人であった(S. Woodburn Kirby, *The War against Japan, Volume I: The Loss of Singapore* [London: Her Majesty's Stationery Office, 1957], p. 163)。

³¹ 辻『シンガポール』40頁。

³² 沖『山下奉文』449頁。

³³ シンガポール攻略作戦時、各砲の弾薬は10基数(1000発)、各人の糧秣は精米3日分、乾パン2日分、携帯缶詰肉3日分、調味品、粉胡椒、粉味噌5日分、携帯食塩2回分、砂糖2回分であった(陸戦史研究普及会編『マレー作戦』200頁及び安岡『人間将軍』341頁)。

³⁴ 第56師団はフィリピンではなく、ビルマ方面作戦に投入された。

³⁵ Q作戦とは、当初は第56師団、のちに第18師団の一部(歩兵2個大隊)をマレー半島東岸のクアンタンに上陸させる作戦。S作戦とは、第18師団主力(歩兵4個大隊)を同じくマレー半島東岸でクアンタンより南のエンドウまたはメルシン付近に上陸させる作戦。

³⁶ 陸戦史研究普及会編『マレー作戦』129頁。第25軍の開戦当初の作戦計画では、返上した第56師団を同作戦に用いることになっていた(同上、26頁)。

必要性は薄れたと考えるようになる。ただでさえ敵前上陸作戦には多大な危険が伴い、多数の犠牲者が発生することは避けられない。むしろ、山下は精鋭部隊である第 18 師団にはシンガポール攻略作戦での活躍を期待するようになっていた³⁷。そして、おそらく山下はシンガポール攻略のために同師団の戦力を温存したいと思うようになったのではなからうか。あるいは牟田口に無理をさせたくなかったのかもしれない。他方、シンガポールに停泊するイギリス艦隊への攻撃を優先的に考えていた海軍も敵前上陸作戦には反対であった。南方軍はなおも敵前上陸作戦の実施に固執したが、海軍の協力が得られなかったため断念せざるを得なかった。結局、第 18 師団主力は何ら危険を冒すことなく、1942 年 1 月 22 日、シンゴラに上陸した³⁸。

その割りを食ったのは第 18 師団の隷下部隊でありながら、主力に先んじて開戦当日にコタバルに上陸、その後、第 25 軍主力への合流を目指してマレー半島を西方へ横断しつつ南下を試み始めていた倭美支隊であった。Q 作戦の中止がまだ正式な決定をみないうちに、南方軍との協議の上で、山下は第 18 師団主力の代わりに、倭美支隊に Q 作戦で攻略を計画していたクァンタンの攻略を命じたのである（1941 年 12 月 15 日）³⁹。倭美支隊は陸路を長距離進軍するための輸送、渡河等の資材を装備していなかったが、倭美浩支隊長は「軍命令をいただいた以上、断固実行する」と快諾した⁴⁰。幸いにして倭美支隊は任務を遂行し得たが、こうした倭美支隊の運用方法は現有兵力の有効活用とすべきか、その場しのぎの便法とすべきか、疑問が残る。

山下の牟田口に対する配慮は格別であった。第 18 師団がシンゴラに上陸した時点で、第 25 軍の第一線はすでにクルアンに進出していた。シンゴラからクルアンまでは約 1000 キロの距離がある。第 18 師団は陸路を追及しなければならなかったが、同師団が保有する自動車は 100 両に満たなかった。また、この頃ようやくクアラルンプールまで復旧した鉄道は、軍需品の輸送で手一杯であり、部隊を輸送する余裕がなかった。1000 キロもの道のりを徒歩で進軍するしかないと思われた時、山下は近衛師団と第 5 師団に命じて、それぞれから 200 両、合わせて 400 両の自動貨車を第 18 師団の移動のために

³⁷ 寺崎隆治「小沢南遣艦隊と南方作戦」(『丸』別冊第 8 号「戦勝の日々」1988 年 3 月) 105 頁。第 18 師団をシンガポール攻略に投入することが第 25 軍の構想として固まるのは、S 作戦の中止が決定した 1942 年 1 月 19 日頃のことである。当初、第 25 軍には第 18 師団をペナン付近に集結させて、スマトラで使用する構想があった。しかし、ゲマス、バクリ、ジョホール州の各戦闘におけるイギリス軍の抵抗、近衛師団と第 5 師団の戦力低下の様相などを見て、第 18 師団をシンガポール攻略へ投入するという最終的な結論が下されたのである(国武「馬來戦記」及び陸戦史研究普及会編『マレー作戦』190 頁)。

³⁸ 第 18 師団の一部(木庭支隊)はコタバルに上陸し、倭美支隊を追及、同支隊に代わって、S 作戦で攻略を計画していたエンドウ、メルシンを攻略した。

³⁹ 倭美支隊をクァンタン占領作戦に参加させるために南下させるというのは、南方軍の発案であったようである(国武「マレー軍司令部」482 頁)。

⁴⁰ 同上、483 頁、国武「馬來戦記」。

供出させた⁴¹。これは開戦以来約1か月の待機を強いた牟田口に対する山下の配慮であったろうし、シンガポール攻略作戦のためにも第18師団の将兵を疲労させまいという意図もあったであろう。おかげで、第18師団は上陸1週間後の29日にクルアンへ到着することができた⁴²。

山下と牟田口に関してはこのようなエピソードもある。シンガポール攻略作戦のさなか、山下は敵の手榴弾で負傷した牟田口のもとへ軍参謀副長の馬奈木敬信を派遣し、見舞い状とぶどう酒を届けさせた。牟田口は山下の心配りにまったく恐縮し、以後、いっそう奮戦するようになる。後年、牟田口は「私は平素と違ってかかる際の軍司令官の一言は、真に肝に銘ずるものである」⁴³と記している。こうした人心掌握は人情家の山下の真骨頂であり、作戦中の指導においてもその効果は大いに発揮された。

山下は牟田口や第5師団長の松井太一郎とは以前からの知り合いであったが、近衛師団長の西村琢磨についてはあまりよく知らなかった。交友関係の有無が必ずしも主たる原因ではなかったかもしれないが、第25軍と近衛師団は作戦中、齟齬をきたすことが何度かあり、後述するように、ついには山下は西村と近衛師団を完全に信用しなくなるに至る⁴⁴。

辻政信の言葉を引用すれば、

近衛師団の壮丁は全国から粒選りされた兵隊だけに、一人々の素質は全国の師団中最も優れてゐたが、惜しい哉、日露戦争以来全く実戦の経験がなく、伝統の久しきに互つて、余りにも上品に、儀礼的に躰けられ、野戦には不向きのような傾向があるばかりでなく、首脳部はともすれば軍司令官に楯つく傾向を見逃せなかつた⁴⁵。

このような性格の近衛師団であったがゆえに、軍司令官の山下は同師団の体面を損ねないようにしなければならなかった。また、西村、牟田口、松井の3人は陸軍士官学校の同期生(22期)であったことから、各師団長とその部隊を可能な限り対等に用いるべく配慮しなければならなかった。したがって、陸路タイを経由して第25軍に追及してきた近衛師団の集結が不十分で、その戦力が第5師団に比して半分程度であったにもかかわらず、近衛師団の顔を立てるために、マレー攻略作戦の後半は両師団を第一線に

⁴¹ これらの車両はマレー作戦においてイギリス軍が放棄した鹵獲品であった。

⁴² 『戦火叢書 マレー進攻作戦』432-433頁、陸戦史研究普及会編『マレー作戦』174頁及び辻『シンガポール』239-240頁。辻の記述では、第18師団は200両を保有しており、近衛師団と第5師団はそれぞれ150両ずつ、合計300両を提供したとなっている。

⁴³ 牟田口廉也「新嘉坡要塞攻略作戦に関する所見」(1959年3月10日、防衛研究所図書館所蔵)。

⁴⁴ このことはシンガポール攻略後、近衛師団に対してのみ感状を発しなかったことが端的に表わしている。

⁴⁵ 辻『シンガポール』34-35頁。

並列させるような形で半島を南下、進軍したのである⁴⁶。

マレー攻略作戦遂行中に生じた作戦指導上の混乱は、少なくとも一度あった。それはペラク河渡河直後のカンパルにおける第5師団とイギリス軍との戦闘においてであった(1941年12月29日~1942年1月2日)。第5師団の第一線部隊はカンパルのイギリス軍陣地突破に苦戦していた。第5師団司令部に派遣されていた軍参謀の国武は、1月2日朝、マレー半島西岸を海上機動して南下していた同じ第5師団の渡辺支隊が、当初の目標としていたセランゴールではなく、カンパル南西のメリントンに上陸したという情報を得た。国武は渡辺支隊をカンパル背後のスンカイ、スリム・リバー方面に前進させ、イギリス軍の退路を遮断するのが適当と考え、同じく第5師団に派遣されていた作戦主任参謀の辻政信を通じて第25軍司令部の許可を得て、渡辺支隊にこの命令を伝えた。ところが夕方になって、第25軍司令部は「渡辺支隊の一部が、セランゴールに上陸した」という情報が入ると、方針を再び変更して、渡辺支隊を当初の計画通り、セランゴールへ向かわせるよう第5師団に命令してきたのである。つまり、第25軍司令部はカンパルに比較的近い場所ではなく、さらに遠方でイギリス軍の退路を遮断する方を選択したのである。松井第5師団長はこの新たな軍命令に従う姿勢を見せたが、辻政信が憤慨した。つまり、作戦主任参謀である辻が軍の承認を得て決定した作戦を、第一線で戦闘中の部隊により苦戦を強いる形で、しかも辻を無視して変更されたことに憤ったのである。結局、軍司令部の方で、セランゴールに到達した部隊は渡辺支隊のほんの一部(船舶工兵の一部)であることが分かり、作戦は国武案の通りに実施されたが、辻の怒りはおさまらず、辞任騒ぎに発展した⁴⁷。

山下がこの件にどの程度かかわっていたのかは判然としないが、山下の決裁なしに軍命令が発されるはずはない。前線で作戦を指導するために軍司令部から派遣された国武の考えに基づく最初の命令は作戦としても、手順としても、妥当であった。しかし、次の命令は「渡辺支隊の一部が、セランゴールに上陸した」という漠然とした確度の低い情報に基づいており、また、作戦参謀の辻や国武に諮ることなく発されたという点で手順も誤っており、性急すぎた不適当な命令であったと断じざるを得ない。山下は家族に「スグスグさん」と渾名されるほどせっかちな性格であったというが⁴⁸、カンパルの戦闘は、山下の性格の欠点が作戦指導に表れた事例と言ってよいであろう。ただし、辞任を申し出た辻に対する対応においては性急さのかけらも見せず、辻の気分が静まるのを待った。

しかしながら、マレー・シンガポール作戦の全期間を通じて、このように第一線部隊

⁴⁶ 国武「馬來戦記」。各師団の連隊数は第5師団が4個、第18師団が3個、近衛師団は2個であった(陸戦史研究普及会編『マレー作戦』204頁)。

⁴⁷ 国武「マレー軍司令部」479-481頁。

⁴⁸ 安岡『人間将軍』310頁。

との意思疎通がうまくいかなかったという例は数少ない。先に山下がサイゴン付近でジャングルやゴム林をはじめて目にした際に、連絡に注意する必要性を感じたことに触れたが、山下は軍参謀を頻繁に第一線へ派遣することによって、連絡を徹底すべく意識的に努めたからである。辻政信という実に個性的な軍人を参謀として用いなければならなかったという立場にあったからかもしれないが、このような山下の参謀の用い方はユニークと評してよい。辻が認めているように、「従来高等司令部の派遣参謀と言へば作戦が一段落した後に自動車か飛行機で漸く第一線司令部にやって来て、軍司令官から酒の一本も土産に持ってくるのが習慣」であるが、「第二十五軍の家風は全く異なっていた。どんな苦戦でも誰か一人の参謀が代わる代わるその戦場に顔を出していた」⁴⁹ ののである。山下は参謀長、参謀副長以下 12 人の軍参謀を軍司令部と最前線部隊の間を絶えず往復させて、戦闘指導と戦況把握に努めさせた⁵⁰。こうすることによって山下は第一線の戦力と戦況を把握したのである⁵¹。実際、参謀がほとんど出払ってしまい、作戦課長の池谷が一人残って電話番をしていたというケースがたびたびあったという⁵²。しかしながら、後年、国武が反省の弁を述べているように⁵³、惜しむらくは、近衛師団との間でのこうした連絡が不十分であったことであろう。

シンガポール攻略作戦

ここからは、シンガポール攻略作戦に話を進めたい。先に述べたように、同作戦に関しては、クアラ Lumpur を占領したことによってマレー攻略作戦に目処が立った 1942 年 1 月 13 日、山下が作戦主任参謀の辻に構想を与へ、それに基づいて作戦参謀の国武が立案し、辻と作戦課長の池谷が意見を出しつつまとめ、最後に山下が承認を与えたのである（1942 年 1 月 30 日）。したがって、マレー攻略作戦とは異なり、シンガポール攻略作戦に関しては、山下の完全な責任のもとに作戦が立案されたことになる。ただし、例外として、ジョホール水道は堤道の西側を渡過するという点に関しては、マレー攻略作戦同様、開戦前に東京で計画されていた。

1 月 31 日、山下は第 25 軍隷下の近衛師団、第 5 師団、第 18 師団にシンガポール攻略作戦計画に基づく攻撃準備に関する命令を、2 月 6 日には攻撃命令を下達した。とこ

⁴⁹ 辻『シンガポール』220-222 頁。

⁵⁰ 開戦時の上陸作戦の際には、辻は第 5 師団の第一線部隊とともにシンゴラに上陸している。また、朝枝繁春はパタニに上陸した安藤支隊と行動をとめている。

⁵¹ 防衛研修所戦史室『マレー進攻作戦』310 頁。

⁵² 国武「マレー軍司令部」477 頁。

⁵³ 国武は「ひとつは近衛師団という部隊の性格や、上部のひとの人柄に関係があるかも知れない」とする一方、「その相当部分は、軍司令部の参謀が現地に出かけて、近衛師団方面の実情を確認し、話し合う機会がほとんどなく、電報、電話のやりとりのあいだに、だんだんと誤解の幅が広まったものと反省している」(同上、477-478 頁)。

るが、その直後、山下はすでに伝達した作戦計画を発動直前に冒頭から修正する。

第一の修正は、作戦発動を1日延期したことである。ほぼ予定通りとはいえ、日本軍陸上部隊のジョホールバル到達があまりにも早かったため、補給が追いつかなかった。また、ほとんど不眠不休で前進した将兵の疲労も回復していなかった。したがって、戦闘準備を7日正午までに完了せよとの軍命令が発せられていても、その要求に応えられた部隊はほとんどなかった。そこで山下は作戦発動を1日延期したのである。これには辻政信も「山下将軍は細かいところに気がつき、命令を受けるものの立場になってものを考へられる人であった。天成の将徳といふべきであろう」⁵⁴と手放しで賞賛している。

開戦前、山下は作戦開始から50日でジョホールバルに達し、2月11日の紀元節に合わせて、シンガポールを陥落させたいと考えていた⁵⁵。しかし、ジョホールバルへの進軍が彼自身の計画より5日遅かったため、この時点ですでに、2月11日の紀元節にシンガポールを攻略するという目標はほぼあきらめて、攻撃を急ぐよりも、より確実にシンガポールを陥落させることを優先したのであるか。それとも、マレー半島における戦闘の経験から、3日もあればイギリス軍に勝利できると考えるようになっていたのだろうか。

第二の修正は、近衛師団の運用に関してである。当初の計画では第5師団と第18師団を第一線に、近衛師団を第二線に配して、ジョホール水道を渡過する構想であった。ところが、第二線では師団の面目が保たれないと感じた近衛師団は第一線で使用されることを申し出た。そこで山下はすでに自らが下した攻撃命令を変更して、近衛師団を第一線で用いることにした⁵⁶。

しかるに、2月8日、近衛師団はジョホール渡過作戦の開始を目前にして、準備が不十分であることを理由に渡過の延期を希望してきた。山下はこれを許さず、9日夜の渡過を断固として命じた。近衛師団は命令に従い、9日23時に渡過を開始したが、すると今度は、イギリス軍の「重油戦術」⁵⁷によって一個連隊が全滅したので渡過を一時中止し、第5師団の後方から前進することの認可を求めてきた。国武軍参謀が直ちに調査した結果、そうした被害は出ておらず、水面における重油の問題もそれほどの実害はないことが明らかになったので、こうした状況を近衛師団に伝え、渡過を続行させた。この事件によって、近衛師団に対する山下の不信感はいっそう強まった⁵⁸。

すでに述べたように、シンガポール攻略作戦が発動された時点においても、山下の敵

⁵⁴ 辻『シンガポール』269頁。マレー攻略作戦中にも、山下はクアラランブル占領後、第5師団主力に2日間の休息を与えている(同上、219-220頁)。

⁵⁵ 安岡『人間将軍』284頁。

⁵⁶ 『戦史叢書 マレー進攻作戦』506、565頁、陸戦史研究普及会編『マレー作戦』204頁。

⁵⁷ 「重油戦術」は山下が非常に心配していた問題で、事前に研究演習を実施しているほどである(陸戦史研究普及会編『マレー作戦』194頁、安岡『人間将軍』319頁)。

⁵⁸ 『戦史叢書 マレー進攻作戦』601頁、陸戦史研究普及会編『マレー作戦』229頁、沖『山下奉文』381頁。

情誤認は依然として修正されておらず、山下はイギリス軍の兵力を「二、三万と過少に見」ていたし、イギリス軍は「ブキテマ要塞を奪取すれば降伏」すると予想していた。山下にとって気がかりであったのは、むしろ自軍の弾薬数であった⁵⁹。シンガポール攻略作戦を開始するにあたって、日本軍は各砲に10基数(1000発)の弾薬を割り当てた。山下は補給における弱点をイギリス側に覺られないようにするために、弾薬に限りがあるにもかかわらず、作戦開始当初から砲撃を間断なく続けたのである。

ところが、第25軍司令部がイギリス側の主陣地と考えていたブキパンジャンを占領した2月10日にイギリス側に対する投降勧告を試みても、先方はそれに応じる様子を見せず、頑強な抵抗を一段と激しくするばかりであった。ジョホール水道渡過から6日目の2月14日には、日本軍第一線部隊に残っている弾薬は各砲1~2基数(100~200発)ほどになっていた。軍参謀の中には攻撃を一旦中止し、弾薬を前送させてから再攻することを考える者もいたが、山下は断固として攻撃を続行させた⁶⁰。同時に、山下は15日20時を期して夜間総攻撃に出る計画を立てさせていた。クアラルンプルで山下が辻に示した作戦構想そのままに、イギリス側が投降勧告に応じなければ、「爾後は全兵力を挙げて堂々と殲滅戦に移行」しようとしていたのである。イギリス側が停戦の意志を明らかにしたのはちょうどその時であった。結果を見れば、イギリス側の降伏を招来した山下の指導は正しかったことになる。しかし、仮にイギリス側の降伏がもう1日、2日、遅ければ、事態はどのように推移したであろうか。

「統合作戦」の内幕

マレー・シンガポール作戦は陸・海・空の統合作戦が成功した例とされることがある。

山下は海軍や航空部隊と協定する場合、陸軍の計画とある程度の希望を包み隠さず相手に伝え、その作戦で海軍や航空部隊が実際にいかなる行動をとるかという具体的な部分に関しては完全に相手に任せ、細部に口を挟むことはしなかった。そうすることによって、相手は山下に信用されているという気になったのではなからうか。開戦直前、マレー上陸作戦時の陸海軍協同作戦計画を大本营レベルで合意できずに投げ出されたような形で一任された山下と小澤治三郎・第1南遣艦隊司令長官がサイゴンにおいて陸海軍現地協定を成立させたとき、小澤は山下に対して、「コタバル上陸作戦は、陸軍の要望どおり実行されたい。私は全滅を賭し、責任完遂に邁進いたします」⁶¹と決意を述べたと

⁵⁹ 「山下奉文大将御進講草案」。

⁶⁰ 『戦史叢書 マレー進攻作戦』618頁、陸戦史研究普及会編『マレー作戦』256頁。この時点でジョホール水道北側の攻撃準備位置に多くの砲弾があった(陸戦史研究普及会編『マレー作戦』256頁)。

⁶¹ 寺崎隆治「小沢南遣艦隊と南方作戦」97頁。「協定は誠意だ。最初から全部赤裸々にさらけ出し、目的を示して手段を相手に任せるとき、協定は必ず成立する」とは、この時、その場にいた辻政信の言葉である(国武「マレー軍司令部」467頁)。

伝えられているが、この時の小澤の心境はまさにそうしたものではなかったろうか。

意思の疎通という点でも、山下の軍司令部と海軍や航空部隊との間では問題は少なかった。海軍からは南遣艦隊から永井太郎大佐が第 25 軍付の連絡参謀として派遣されており、第 25 軍司令部と終始行動をともししていたので、第 25 軍の希望が海軍側に伝わったし、海軍側の情報も第 25 軍に逐次入ってくるという状態であった⁶²。したがって、相互理解が得られやすい環境ができあがっていたと言える。

第 3 飛行集団や第 3 飛行団といった陸軍航空部隊との協同も、第 25 軍側から見れば、開戦当初の上陸作戦への掩護からシンガポールへの爆撃に至るまで、比較的、順調であった。ペラク河橋梁をイギリス軍に破壊されるのを阻止するために協力を求めたり（この時は山下自らが第 3 飛行団長の遠藤三郎を説得して協力を得たとされる。）⁶³、マレー半島西岸を海上機動で南下する部隊を掩護してもらうなど、第 25 軍からの当時としては無理な要望に対しても航空部隊はよく応えている。航空部隊には燃料、弾薬などの輸送で第 25 軍の協力が必要であるという裏事情があったにせよ、シンガポール攻略作戦の際にも、南方軍の指導でスマトラ（パレンバン）へ戦力が転用されていたにもかかわらず、第 3 飛行集団は第 25 軍が予想したよりもはるかに多い機数で協力した⁶⁴。

海軍や航空部隊との良好な関係に比して、南方軍との関係はマレー半島上陸作戦直後から拗れ始めた。

きっかけは、コタバルへ上陸を果たした侏美支隊に、開戦の翌日、南方軍が感状を發したことにある。こういうケースでは、師団か軍が申請した上で総軍が感状を出すか、あるいは少なくとも軍や師団の意向を確認した上で行うのが普通である。ところが、南方軍は第 25 軍に何の連絡もせず、侏美支隊に感状を与えた。無視された形の第 25 軍司令部は南方軍のやり方は筋が通っていないと憤慨したのである⁶⁵。

次に先に論じた第 56 師団の返上問題がある。開戦後、半月、先の見通しも立たないうちに兵力の他方面への転用を要求されたのである。第 25 軍の苦渋はいかほどであったか。

それに Q 作戦と S 作戦の中止にまつわる問題が続く。南方軍は第 25 軍と海軍が両作戦の中止を要求しても、依然としてその実施に固執し、容易に中止を決断しなかったばかりか、中止決定後、第 25 軍が大本营のみならず海軍とも直接、連絡をとっているこ

⁶² 国武「マレー軍司令部」482 頁。

⁶³ 『戦史叢書 マレー進攻作戦』328 頁及び遠藤三郎『日中十五年戦争と私 国賊・赤の将軍と人はいふ』（日中書林、1974 年）220 頁。

⁶⁴ 第 3 飛行集団は作戦開始当日は、戦闘機 60 機、軽爆撃機 60 機、重爆撃機 60 機で、翌日以降は、各 40 機、40 機、60 機を参加させた（国武「馬來戦記」）。

⁶⁵ 『戦史叢書 マレー進攻作戦』208 頁、陸戦史研究普及会編『マレー作戦』84 頁及び国武「マレー軍司令部」484 頁。

とに対して遺憾の意を第 25 軍に伝えた⁶⁶。第 25 軍司令部には連絡参謀として海軍から永井大佐が派遣されており、常に行動をともにして陸海軍間の意思疎通をはかっていた。陸海軍の協同行動に支障が生じなかったのはこうした試みが功を奏したからであろう。しかし、南方軍はこの点をまったく理解していなかったのではなかろうか。

さらに、シンガポール攻略作戦実施前になされた航空兵力のスマトラ（パレンバン）方面への転用がある。この時も南方軍は第 25 軍には何の予告もせずに行った。これには「さすがの山下将軍も不快の色を押えなかった」⁶⁷という。南方軍の真意は不明であるが、シンガポールの陥落は時間の問題と見て、戦争全体の攻略目標である蘭領東インド（蘭印）の方に早くも関心が移っていたとしか言いようがない。

国武は南方軍と第 25 軍の関係が良好でなかった理由として、人事上の問題と連絡の不十分さを挙げている。第 25 軍の参謀は作戦立案からマレー・シンガポール作戦にかかわっていた者が多く、事情に精通していたが、南方軍の参謀はそうでなかったため、第 25 軍には南方軍の口出しを好まない雰囲気があった。それを南方軍は不快に感じていたと思われる。また、南方軍から第 25 軍へ参謀が訪れるのは何か要件がある時のみで、それも打ち合わせが終わるとすぐに帰るというパターンであった。何もない時や苦戦の際などに来て状況を確認するといったことはなかったということである⁶⁸。

ここまで再三にわたって言及したように、近衛師団との関係も決して良好ではなかった。シンガポール上陸後の近衛師団の行動も山下をいらだたせた。第 25 軍は近衛師団をしてイギリス軍を側面から攻撃させることによって軍主力方面の戦局を打開しようとしたのであるが、近衛師団の行動は遅滞して軍の期待に沿わず、ついに山下は「近衛師団は尚愚図々々しおり」と嘆いた⁶⁹。しかし、近衛師団の側にも言い分がある。実際に作戦行動を命じられた近衛師団の国司憲太郎・歩兵第 3 連隊長は、「第一線のものには山下の真意は不明、了解に苦しん」だと述べている。国司はその理由を「軍が近衛師団に与えた任務（攻撃目標）がしばしば変更されたことが大きな原因」⁷⁰と考えている。確かに、近衛師団の歩兵団は当初の計画に従ってマンダイ山を占領したが、その後、2月 11 日の歩兵団命令ではチャンギー要塞へ、次いで同日の師団命令ではニースン付近へ、12 日の師団命令では南部水源地東南側地区へというように再三にわたり修正命令を受け、そのたびに異なる攻撃目標に向けて転進し、イギリス軍との遭遇戦を戦いながら、

⁶⁶ 『戦史叢書 マレー進攻作戦』286 頁。

⁶⁷ 辻『シンガポール』232 頁。

⁶⁸ 国武「マレー軍司令部」481-482、484 頁。

⁶⁹ 『戦史叢書 マレー進攻作戦』601 頁及び陸戦史研究普及会編『マレー作戦』247-249 頁。業を煮やした第 25 軍司令部は近衛師団司令部を迂回して、同師団歩兵団主力の追撃隊となって前進中の沢村攻撃隊に、友軍機から通信筒を投下して、直接、軍命令を伝えた（陸戦史研究普及会編『マレー作戦』254 頁）。

⁷⁰ 陸戦史研究普及会編『マレー作戦』249 頁。

ジャングルの中を夜を徹して前進しなければならなかったのである⁷¹。しかしながら、作戦終了後に作成された天皇に対する「山下奉文大将御進講草案」では、「近衛師団の使用適当、効果的なりしこと」が作戦成功の要因の一つとされている⁷²。これも近衛師団の体面を保つための配慮なのであろうか。

おわりに

以上、マレー・シンガポール作戦において山下が下した重要と思われる判断のいくつかを中心に同作戦中の山下の指導について論じた。幸か不幸か、おそらくはシンゴラ上陸直後に一挙突進を選択したこと以外は、山下の判断が戦局に大きな影響を及ぼすことはなかった。しかし、山下が下した判断の裏には、常に、イギリス軍の兵力を過小評価していたという誤った敵情認識があったことは、すでに何度か触れたとおりである。また、性急な性格が指導面に表れたこともあった。さらに、情の厚い山下であったからとりわけそうであったのかもしれないが、客観的な情勢判断よりも、主観的な人間関係を優先させたケースがたびたびあったことは否定できない。牟田口と第18師団に対する配慮は功を奏したが、西村と近衛師団に対する温情は結果的に事なきを得たものの、かえって仇となった。マレー・シンガポール作戦における指導全体から見れば、その一部にすぎないかもしれないが、ここで取り上げた作戦中に山下が下したいくつかの判断については、よく言っても結果オーライといった評価を与えるのがせいぜいではなかろうか。

⁷¹ 陸戦史研究普及会編『マレー作戦』248-250、253-254頁。

⁷² 「山下奉文大将御進講草案」。